

柴田哲雄著
『汪兆銘と胡耀邦 民主化を求めた中国指導者の悲劇』

坂井田 夕起子

はじめに

本書は15歳からの「伝記で知るアジアの近現代史」シリーズの1冊である。「欧米中心の偉人伝とは一線を画すアジアの伝記」をうたう同シリーズは、本論執筆時点で寺見元恵『フィリピンの独立と日本』、白石昌也『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子』、そして根本敬『ビルマ独立への道』が出版されている。アジアの指導者伝記シリーズといえば、20年ほど前の岩波書店〈現代アジアの肖像〉が思い出される。彩流社のシリーズは、日本との関係に重点をおき、中国、ベトナム、ビルマ、フィリピンの四つの国の政治指導者を取りあげている。

著者の柴田哲雄氏は、これまで『協力・抵抗・沈黙—汪精衛南京政府のイデオロギーに対する比較史的アプローチ』（成文堂、2009）、『中国民主化・民族運動の現在—海外諸団体の動向』（集広舎、2011）、『習近平の政治思想形成』（彩流社、2016）の3冊の専門書を上梓している。本書は、これらの専門的な研究を基礎に汪兆銘と胡耀邦を取りあげるが、柴田氏が二人を選んだ理由はともに民主化を求めて闘った政治家で、「親日」とみなされながら「現実の日本」に裏切られた共通点（7頁）にある。柴田氏は、本書で用いる「民主主義」を代表が自由な選挙によって選出される政治形態、「民主化」は民主主義を構成する諸要素の実現（9頁）とする。以下、具体的にみていきたい。

I

第1部では、汪兆銘が「激動の20世紀前半の時代に革命を志して民主化の旗振り役になりながらも、満州事変後に、救国のために民主化を犠牲にするに至るまでの軌跡を中心に描く」（21頁）。汪兆銘（1883—1944）は清朝の衰退とともに没落した読書人の子孫で、父のおかげで詩文の教養を身に付け、陽明学に心酔し、革命家としての素地をつくった（24頁）。20才で広東省の官費留学生に選ばれて日本の法政大学速成科へ留学し、好成績で卒業して専門部に進学した。大学では民法や国際私法の大家・梅謙二郎、富井政章、山田三良らの講義を聴講し、憲法学の講義では主権在民や民権という思想に親しみ、革命思想を育んだ（30頁）。日本留学中、中国同盟会に参加した汪兆銘は評議部議長に抜擢され、機関誌『民報』で文才を発揮した。当時の梁啓超は、中国に民主主義は時期尚早だと主張し

ていた。汪兆銘はこれに反論し、フランスやアメリカ同様、中国国民も自由・平等・博愛の精神を備えており、民権や立憲を確立することは十分可能だと反論した。彼の主張にはルソーの影響がみられた（37 頁）。

その後、中国同盟会は日本を追われ、東南アジアへ拠点を移し、汪兆銘は華僑から革命の軍資金を募る仕事を任された。マレーシア華僑の裕福な娘・陳璧君と出会ったのはこの頃である（40 頁）。同盟会は度重なる武装蜂起の失敗に分裂と士気低下が表面化した。汪兆銘は、状況を打開するため清朝要人の暗殺を計画して失敗、逮捕されて終身刑となった。孫文や黄興、胡漢民らがそろって止めた暗殺計画に汪兆銘がこだわったのは、アナーキズムの影響があった（41 頁）。辛亥革命の勃発で釈放された汪兆銘は、袁世凱の腹心楊度と「国事協済会」を組織し、孫文と袁世凱の密約の合意をとりつけ、宣統帝の退位を実現した。1912 年 1 月 1 日、孫文が臨時大總統に就任した際の就任宣言書は汪兆銘の代筆で「文明国の尽くすべき義務を尽くして、文明国の権利を享受する」の部分は法政大学時代の山田三良からの借用だった（47 頁）。

辛亥革命後、汪兆銘は国民党が民生主義を放棄したことに批判的で党の活動から距離をおき（48 頁）、フランスへ留学した。この頃、汪兆銘はアナーキストの李石曾や呉稚暉と道德改良運動の組織「進徳会」を設立した。彼らが目指したのは権力機構や法律に依拠しない相互扶助の社会であり、重要な会則は「官吏にならない」「議員にならない」だった。実際、汪兆銘は孫文ら革命派と袁世凱双方からの誘いを固辞した。最終的に汪兆銘は孫文の側近として政治の表舞台に戻るが、政敵の妨害には抵抗せず辞職、外遊を繰り返す彼の行動には「進徳会」の影響があった（53 頁）。

フランスでの汪兆銘は勉強に加えて、李石曾や呉稚暉と「教育救国」の活動を目指し、各種雑誌を発行したほか、在仏中国人勤労学生のための互助組織や「リヨン中仏大学」などの設立に関与した。これらの経費は東南アジア華僑の献金で賄われた。汪兆銘は多くの中国人が三民主義を理解していないことが辛亥革命後の混乱の原因だとみなしており、「教育救国」の活動で中国で西欧思想を広め、三民主義を実現したいと熱望した（55 頁）。

孫文が国民革命を開始すると、汪兆銘は中国の統一に理想の実現を見て政治に復帰した。当初、汪兆銘は孫文の国共合作に消極的な姿勢をとり、その後、積極的な姿勢に転じ、孫文死後には国民党内左派のリーダーになった（64 頁）。孫文の信頼が厚かったこともあるが、より大きかったのはソ連顧問の支持である。汪兆銘は広州の国民政府主席に選出され、孫文の後継者として政治家キャリアの絶頂期を迎えた（66 頁）。しかし、国民党内で国共合作への批判が高まるにつれ、政権内で権力基盤を持たない汪兆銘らは労働運動や農民運動、そして中国共産党に依拠していった。1926 年 3 月、ソ連顧問・中国共産党と蒋介石派の対立が表面化すると、汪兆銘は病気を名目に辞任し、渡仏した（69 頁）。以後、蒋介石は国民党内で実権を握り、権力を手中におさめていった。1927 年、汪兆銘が帰国して蒋介石と会談するもまとまらず、蒋介石は反共クーデターをおこした。汪兆銘ら国民党左派の武漢政府は蒋介石を除名したが、南京の蒋介石は自力で国民政府を樹立し対抗した。結局、汪兆銘ら左派は国共合作解消を決断し、汪兆銘は引退を表明して渡仏した（74 頁）。

1928年10月、蒋介石は国民政府主席に就任し、個人独裁に傾斜していった。翌年帰国した汪兆銘は「訓政時期の民主化論」を訴え、民主勢力の育成には国民党自らが権力を抑制的に行使すべきと力説し、蒋介石を批判した（84頁）。1931年、満州事変が勃発すると、国民党内は汪兆銘が政治・外交、蒋介石が軍事の二頭体制に落ち着いていき、汪兆銘は実質ナンバー2となった（86頁）。汪兆銘の対日外交政策「一面抵抗・一面交渉」は、蒋介石の対共産党戦争を優先させる「安内攘外」とともに世論から厳しく批難され（89頁）、1935年にはテロによって怪我を負った。汪兆銘は療養のためドイツへ出国し、再び帰国したのは1937年1月である（95頁）。

行政院長時期の汪兆銘は、日本と中国共産党という二重の軍事的脅威への対処を最大の課題とし、胡適ら世論が求める民主主義を認めなかった。満州事変以降、汪兆銘は非常事態の下での民主化後退はやむを得ないと繰り返し訴えた。政府が世論に従えば抗日一辺倒になり、非常事態を乗り切れないとの判断からである。以後、汪兆銘は二度と民主化を主張しなかった（99頁）。

第2部では、天安門広場で「民主化を求める学生や市民にその死を哀悼され」「民主化のシンボルになった」胡耀邦の人生をたどる（114頁）。胡耀邦（1915－1989）は、湖南省の農業を生業とする客家の一族に生まれ、一族のための学校で勉強した後、高級小学校に編入し、共産党員の教師たちに感化されて革命を志した。1929年、中学校が内戦で閉校になった胡耀邦は、中国共産主義青年団に秘密裏に加入した。紅軍での最初の仕事は共産党根拠地で農村の青少年を勧誘したり、逃亡兵への帰隊を勧告する仕事だった。ここで胡耀邦は「AB団事件」に巻き込まれる。最終的に嫌疑がはれ、1933年に共産党に入党するが、胡耀邦は生涯この事件を忘れず、共産党支配の不条理としてとらえた（126頁）。

1934年、胡耀邦は長征に参加し、九死に一生を得たおかげで、その後次々と要職に抜擢された。1937年、胡耀邦は共産党の幹部養成のための抗日軍政大学（前身は紅軍大学）の第二期生として入学し、卒業後は毛沢東の直々の指名で抗大に残って政治部副主任をつとめた。「長征幹部」に加えて「抗大OB」という有力な政治資産により、胡耀邦は23才の若さで中央軍事総政治部組織部副部長に就任、その後も部長に抜擢された（128頁）。

当時の胡耀邦は毛沢東の主張を全面的に擁護しており、国民党地域からくる知識青年の多くが「規律観念希薄で、自由散漫」だと批判していた（129頁）。しかし、整風運動で妻の李昭が国民党のスパイ容疑をかけられると、胡耀邦は自分がAB団の濡れ衣をさせられた体験から、整風運動で自白を強要しないよう指示を出すなど（132頁）、独自の対応もみせた。

抗日戦争終結後、第二次国共内戦が勃発すると、胡耀邦は前線に政治将校として赴いた。1948年8月、胡耀邦は10万人以上を抱える華北軍区第一兵団の政治部主任に就任し、閻錫山などへの寝返り工作で大きな成果を上げ、内戦勝利に寄与した（134頁）。内戦勃発に先立つ1945年4月、胡耀邦は29才の若さで共産党第7回全国代表大会の正式代表になった。この大会では、毛沢東思想を党の指導思想に決定し、戦後の民主的な連合政府論が提起されていた。胡耀邦は当時、社会主義でなく、過渡期の体制とされた新民主主義を信奉

していた（135 頁）。しかし、朝鮮戦争の勃発により中国はわずか数年で社会主義に移行することになった。

1950 年、胡耀邦は鄧小平の部下として四川省北部を掌握し、土地改革を実施した。1952 年には北京に戻り、中国新民主主義青年団中央委員会第一書記に就任。以後、文革で失脚するまで青年工作のトップにあり続けた。60 年のキャリアの半分近くを青年工作に費やした胡耀邦は異色の存在で、人脈形成も共青团が中心となった。胡耀邦は青年に対して「社会経験が乏しく、情熱が有り余っていて、冷静さが不足しており、熱しやすく冷めやすい。老幹部ですら誤りを犯すのに青年に手厳しければ人心も得られない」と寛容な態度をとりつづけた（141-142 頁）。

百花斉放運動を積極的に支持した胡耀邦は、反右派闘争では保身を優先し、青年たちを助けることができなかった。反右派闘争以後、胡耀邦は慎重に発言。それでも、大躍進運動の時期に現場を視察して農民たちの苦境を知ると、胡耀邦は劉少奇や鄧小平を支持し、再び批判されることになった。文化大革命が始まると、胡耀邦は紅衛兵に迫害され、湖南省の「五・七幹部学校」に送られて労働改造を強いられた。1973 年、鄧小平の復活によって、胡耀邦も國務院副総理に就任し、1975 年 7 月には中国科学院副院長になった。しかし、周恩来の死を契機として起こった第一次天安門事件の黒幕とされ、鄧小平は再度失脚。胡耀邦も職務停止の処分となった。

毛沢東が死去して四人組が逮捕されると、ようやく鄧小平が復帰できるようになった。胡耀邦は鄧小平による打倒華国鋒の先陣を切り、中央党校スタッフを動員して冤罪の掘り起こしと名誉回復で鄧小平を擁護した。1978 年 12 月 11 期 3 中全会では毛沢東路線から近代化路線への移行が決定的となり、胡耀邦は鄧小平の後継者と目されるようになる。

胡耀邦は 1980 年にチベット自治区を視察、共産党の政策の誤りを認め、人事を一新、チベット族の幹部を大量抜擢、自治権拡大、チベットの実情にあった政策実施を試みてダライ・ラマの信頼を勝ち取った。また、対日外交政策も独自のアプローチをとり、中曽根康弘との個人的親交なども加わって、多数の青年交流も実現した。しかし、1985 年の中曽根康弘の公式参拝を契機に反日デモが勃発すると、胡耀邦は数カ月後に批判を受けて失脚を余儀なくされた。

第 3 部では、第 1・2 部の内容を踏まえ、「主として中国共産党の民主化をめぐる葛藤の軌跡」をみるが、それはすなわち「救国のために民主化を犠牲にしていたのが、救「党」のために民主化を犠牲にするようになった」軌跡であると柴田氏という（190 頁）。

現代の中国で民主主義が実現していないのは、中国共産党が一党独裁を行っているだけでなく、中国独特の「伝統的な民主」の影響が社会に根を張っているからである。李沢厚によれば、中国における「民主」は清廉な官僚や善い皇帝が「民を尊ぶ」ことで、民衆が自分たちを尊ぶことではない（191 頁）。その伝統を理解していたからこそ辛亥革命後の汪兆銘は「教育救国」の啓蒙活動で中国人の思想を変えようとし、孫文の段階的な民主化を受容し、そして孫文亡き後に個人独裁に走った蒋介石を批判した。しかし、満州事変を契機として行政院長に就任した汪兆銘は、日本と共産党という脅威から中国を救うため、

権力の集中を必要と考え、民主化を犠牲にしたとする（193 頁）。

ロシア革命が成功し、中国でマルクス主義の影響が大きくなると、西欧由来の民主主義がブルジョア民主主義として揶揄されるものになり、ブルジョア思想への攻撃が封建的性質の復活へとつながっていった。そして、北伐や第一次国共内戦、長征、日中戦争、第二次内戦を経る中で「自由や民主といった啓蒙の宣伝」よりも「鉄の規律、意志の統一、集団の力」が求められていき、さらに朝鮮戦争の勃発から冷戦時期にいたるまで「救国」のための戦時体制が敷かれてきた。鄧小平の時代になって、ようやく共産党の最優先課題は「救国」でなくなった。胡耀邦にとっての「民主」は、文革を引き起こした四人組などの「封建主義」を排除することであり、文革再来を防ぐため、封建主義にとって代わる「高度な民主」＝言論の自由の漸進的な拡大を目指した。しかし、鄧小平にとって「民主」は危険なブルジョア自由化」であり、共産党の一党独裁の崩壊をもたらしかねないもので認めることはできなかった（200 頁）。

ソ連が崩壊し、冷戦体制が終結した現代世界において、中国共産党の体制を維持することこそが中国にとっての「救国」になった。共産党統治に異議を挟むものを弾圧し、少数民族の権限を制限していった。現在の習近平は、かつてないほど党内での政治基盤を強化し、政治・経済・文化など多方面にわたって自由を求める動きを弾圧した。最新の IT 技術を活用して国内の統制を強めるだけでなく、アジア・アフリカ諸国に「中国モデル」を広め、グローバル化が進んで経済格差が拡大した世界で色あせた「西欧モデル」に代わろうとする動きも見せている（225 頁）。

II

以上が本書の概要であるが、本書の意義は、なによりも汪兆銘と胡耀邦という「ナンバー 2」にスポットをあて、彼らとの関わりの中で誰もが知る孫文、蒋介石、毛沢東、鄧小平、習近平らにも言及し、中国近現代史の流れの中に日本との関係を手際よくまとめた点にある。高校世界史の知識を有する読者が、さらに近現代中国に興味を向けようとした時、本書が書店に新刊として並んでいるのは心強い。汪兆銘と関係の深い愛知県を拠点とする柴田氏と異なり、大阪在住の評者の肌感覚では、現代日本社会における汪兆銘は忘れられた存在であり、大学の授業でも一般の講演でも説明に一苦労する。たとえば、日中友好協会名誉会長を務めた平山郁夫（1930 - 2009）の著書には、日中戦争中の南京の記述があっても汪兆銘は登場しない。重慶の蒋介石と混同されているからである（美術の森編集部、2001 年）。現在の大学生は天安門事件後に生まれた学生で、ほとんどが事件そのものを知らない。評者は授業で配布するために、天安門事件に関わる新聞・雑誌の記事を何年も集めてきたが、特集どころか関連記事すら減り続けた。そして、天安門事件から 30 周年にあたる今年の 6 月 4 日には、かつて天安門事件に集まった中国の大学生が夢見た「自由の国」アメリカの各地で、黒人差別に抗議する民衆デモと警官たちの衝突が起き、その映像が中国のインターネットにあふれた。鄧小平以後、中国の指導者が変わるたび、日本では

「民主化」「改革派」のキーワードを用いた期待が飛び交い、消えていった。そして、習近平政権が二期目を終えようとしている現在、これらのキーワードは希望を全く失ったようにみえる。本書は、現代日本と中国の関係を振り返り、中国に日本が期待してきた「民主化」の軌跡を改めて考える素材を提供してくれている。

しかし、柴田氏が手際よくまとめる1・2部の中国近代史は、西欧由来の民主を求めた革命家たちと「無能な清朝」(115頁)や「個人独裁」を目指す袁世凱や蒋介石との対立として描かれる。この枠組みは、天安門事件以降の日本の中国近現代史研究が克服をめざしてきた革命史観や「民主と独裁」の単純な二項対立に近い。たとえば、冒頭で紹介した<現代アジアの肖像>シリーズの野村浩一氏は蒋介石に「独裁者」の言葉を用いず、中国の伝統的「家父長制」や儒教的な治者エリートの思考など、状況毎に丹念な解説を試みている(野村浩一, 1997)。2010年以降に刊行された岩波新書のシリーズ中国近現代史でも、革命史観の再考は提示され、各巻に可能な限りの新しい研究成果が盛り込まれている。ではなぜ、柴田氏はあえて古い枠組を採用したのだろうか。

評者は、柴田氏が汪兆銘に「一貫した民主の旗振り役」を見出そうとしたことが、結果的に古い枠組を用いる原因の一つになったと考える。かつて汪兆銘の「民主の企て」を見出した土屋光芳氏は、1931年の「訓政時期約法」に対して、憲政移行期の国民党の独裁を制限し、「人民の権利と自由の規定」するものだとして評価した(土屋光芳, 1995)。同時に、辛亥革命前の汪兆銘が「滅満興漢」のイデオログだったと繰り返し述べ、フランス留学時代に中国国民(市民)の中に漢民族以外も含めるようになったことなど(土屋光芳, 1997) 時期的な思想の変化をもあきらかにしている。

しかし、本書は土屋氏が評価した「民主」を起点に、それ以前の汪兆銘の言説にも一貫した「民主」(「革命」)的要素を見出そうとした。たとえば、幼少時期の陽明学への傾倒、母親への思慕にもとづく男女平等の恋愛観、日本で学んだ憲法学、そしてアナーキズムの影響などである。これらは主に、汪兆銘の評伝や汪自身の自叙伝・言説にもとづく叙述であるが、このような文献を用いる場合は当時の政治的背景を加味した史料批判が必要である。残念ながら、本書においてそのような手続きがふまれているとはいえない。

また、本書では「民主」的でない汪兆銘の言説への言及はなされない。たとえば、日本留学時代、共和を主張して梁啓超と論戦を繰り広げたことには言及があるが、同時期の汪兆銘が「排満興漢」のイデオログだったことへの言及はない。一方で、その後の汪兆銘が、中国人の民族主義理解が「排満」でしかないと嘆く部分には言及がある。

柴田氏は、汪兆銘にとってのアナーキズムの影響をかなり多方面に指摘しているが、汪兆銘の引退癖と結びつけるのはかなり無理があるように思われる。当時は蒋介石もしばしば下野と復帰を繰り返していたように、両者ともに「引退」は「政治的駆け引き」だった(石川禎浩, 2010, p. 43)。清朝要人の暗殺についても、アナーキズムではなく中国の伝統的な「英雄主義」の影響だったとする研究がある(土屋光芳, 2013, p. 91, 吉澤誠一郎, 2003, p. 191)。

評者は、晩年の政治行動のみに基づいて汪兆銘の評価を下すのは公平でない(21頁)

という柴田氏の意見に全面的に同意する。同時に、20才まで中国で生活して伝統的な科挙試験にも合格し、日本やフランスに留学し、国内外の政敵とわたりあい、激動の中国革命を生き抜いた汪兆銘に一貫した近代的な思想のみを期待することもできない。本書は一般向けの書籍でもあり、執筆にはさまざまな制約があったことが想像できる。それでも、柴田氏の次回作には、汪兆銘について、より豊かな人物像を期待したいと思うのである。

(彩流社、2019年10月刊、254頁、2200円＋税)

(さかいだ ゆきこ・愛知大学国際問題研究所)

参考文献

石川禎浩（2010）『革命とナショナリズム』（シリーズ中国近現代史③）岩波新書

川島真（2010）『近代国家への模索』（シリーズ中国近現代史②）岩波新書

土屋光芳（1995）「汪精衛の民主政治論についての一考察」『政経論叢』第63巻第1号

土屋光芳（1997）「辛亥革命前後における汪精衛の国家観についての一考察」『政経論叢』第66巻第1号

土屋光芳（2013）「汪精衛と宋教仁の日本留学経験一二人の革命家の比較研究」『政経論叢』第81巻第5・6号

野村浩一（1997）『蒋介石と毛沢東』岩波書店

美術の森編集部（2001）『平山郁夫と玄奘三蔵法師ものがたり』生活の友社

吉澤誠一郎（2003）『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』岩波書店

吉澤誠一郎（2010）『清朝と近代世界』（シリーズ中国近現代史①）岩波新書